

利根町文化財保護審議会の先生方
利根町教育委員会 生涯学習課の皆さま

この度は、利根町文化財保護審議会に、お招きを頂き心より御礼申し上げます。

利根町役場の皆様とのご縁は、私の弟が 「利根町立歴史民俗資料館」 に杉野東山、忠四郎の筆による掛軸十幅、扁額等を、お預けしたことに始まります。

それは令和四年のことでした。

更に時は過ぎ、杉野分家最後の一人となった母は老いを重ね、日々、小さくなる生命を燃やし過ごしております。

杉野分家の遺蹟を残したい、それを後世に伝えたい、その母の思いをお伝えしたく、文化財保護審議会に出席させていただきます。

母が綴ったエッセイ集が手元に数冊ございましたので、何らかの参考になればと思い送らせて頂きます。

昭和、平成、令和と三つの時代を生きてきた一人の女性が、その長い道のりを振り返りながら、様々な思い出を綴っております。

審議会の先生方、利根町役場の皆さま、生涯学習課の皆さまにお手に取っていただくことがあれば、望外の幸せに存じます。

皆々様のお力をお借りしたく存じますので、審議会当日は、何卒宜しく願い申し上げます。

令和7年 6月25日
資料

利根町文化財保護審議会の先生方
利根町教育委員会 生涯学習課の皆さま

私は、昭和、平成、令和と三つの時代を生きてきました。私が歩んできた長い道のりを振り返りながら、この手紙を書いてみようと思ったとき、自分の故郷は何処であろうかと、ふっと思い、ペンが止まりました。

幼い日、両親と過ごした日本橋、母として四人の子供たちと過ごした赤羽、父祖の地として疎開した布川、其々の地に、それぞれの思いがあっても、故郷は何処なのかと思います。

戦争によって全てを奪われた娘の時代、辛く悲しい思い出ばかりであってもそれは忘れることはできない時であることは間違いありません。

遡ること80年前…の話になります。

この思い出を綴ることで、私の思いが皆様に伝わることを願っています。

空襲警報が鳴らない夜はありませんでした。その前の晩も、日本橋界限に焼夷弾は振り注ぎ、近隣の家々を焼き尽くしました。

「もうこれ以上は止む負えまい、商売どころではない」 父の一言で疎開が決まりました。

昭和19年3月、戦況は悪化する一方で、食料すらままならない状況でした。

私は女学生でしたが、教科書を開く場であるはずの教室は工場となっていま

した。

朝、学校の校庭に集まったあとは、勤労働員で印刷工場に向い作業をするのが日常でした。授業を行う時間などはなかったのです。

疎開先は、杉野家縁の布川でした。杉野本家を頼りとしましたが、本家の事情もあり、他家の屋敷を借り、布川は馬場の地に落ち着くことになりました。

列車は、江戸川を渡り、常磐本線から成田線に分岐して走りました。

戦禍を知らぬような田畑が、緑が堤防を超えると広がっていました。

この地であれば、静かな夜を過ごせるのではないか、私は春まだ浅い布川の家でそのようなことを思っていました。

しかし、この地でも空襲警報は鳴りました、布川から遥か東の空が、東京方面の空が、赤く燃え、立ち昇る炎に焼かれているのが望めました。

布川は父祖の地とはいえ、本家が間近にあるとはいえ、東京から移ってきた、我々家族には、布川の人たちの仕打ちは冷たく、辛い思いを日々しながら過ごしていました。

食料もない私たちです。地元の人が、畑で取れた、一円の南瓜を八円で売りつけました。薬屋では「東京の人たちには売らない」と言って薬を売ってくれませんでした。

暮れゆく裏道を一人歩いていると、「あんた、東京のセツ屋の子だね」と声をかけて、胡瓜や茄子を分けてくれた人がいました。

伊勢平さんのおばあちゃんだったのです。私は嬉しくてお礼を言うのも忘れ

ました。

東京から移り住んだ、他所者である私たちには致し方ないことであり、終わらぬ戦争は、全ての人々の心を荒ませていたのです。

疎開先での辛く寂しい毎日、遊ぶことなどもなく、軋みながら走る成田線に乗り、女学校内の工場に通う日々、日本橋の家が懐かしい、既に焼けてしまったのだろうか、揺られる車内でそのようなことを、ぼんやりと思ったものでした。

寂しさの中で一人であった私を、慰め、心穏やかにしてくれた場所がありました。それは利根町羽中の応順寺でした。

お寺には、戦前、父、徳太郎が、ご先祖様の墓石に並んで、杉野分家のお墓を建てておりました。更にそこに、徳太郎の両親の墓を並び祀りました。

父のご先祖様に対する思いは厚く、それを守ってくださる応順寺に対する感謝の心は深かったのです。

本堂に上がると、欄間の筆頭に、父の名を墨書した名札が掲げられていました。それは、お寺への寄進をした人たちを示す名札でした。

本堂の直ぐ手前、杉野分家の並んだ墓碑の中央に建つのが「東山碑」でした。寂しく辛い思いばかりする、疎開生活の中で、「杉野東山」という書家が、ご先祖様に居ることを知ったのです。

「また来ましたね、よくお参りしていきなさい」「お説教の時も是非、聞きに
おいでなさい」

そういつも優しく声を掛けてくれたのは、住職の了善さんでした。

祖父母の住む、二長町の隠居所まで、春、秋のお彼岸にお経を上げに来てくれた、私もよく知る住職さまでした。

いつも、東京の檀家を何件か廻り、昼頃にお出でになりました。

祖母がお寿司を取って差し上げ、そのお寿司を了善さんが召し上がっていた姿を思い出します。

（お寺さんがなまぐさを召し上がっていいのかしら）と私の細やかな心の問に、にこりと笑っている住職さまのお顔が（こちらだからだよ、杉野さんだからだよ）と答えているようでした。

ある日の朝、茨城南部、千葉一帯が空襲を受けて、東京の学校に向かう途中、常磐線は停まりました。

列車を降り鉄橋を歩いて渡りました。金町から松戸へ向けて、枕木に渡してある、細長い板を一枚、二枚と踏んで、学校に向けて前へ、前へと歩きました。私たちは立ち止まることはなかったのです。

戦争が終わり、布川の屋敷には、元の住人である、陸軍将校が戻ってくるとの話になり、布佐から土浦へ、亀城近くに居を移しました。

土浦駅、始発 朝五時二十一分の常磐線に乗るようになりました。車両の窓ガラスには板が打ち付けられ、差し込む明りを閉ざしていました。

始発列車が走り出すころには、薄暗い車内に、乗客は私のほかに僅かでした。止まる駅を数えるにつれて、乗客は増えてゆき、やがて満員となりました。

暖房はなく凍えそうな車内に、一枚、二枚と残る窓ガラスには、人息れで、木の葉のような氷の結晶が張り付きました。

列車が松戸の辺りまで走ると、朝日が差し込んで、氷の結晶が見るみるうちに溶け落ちていきました。

美しい結晶を見ながら、母が朝早くに温め直してくれたさつまいも、お米の代わりに配給された「茨城一号」を二つだけ鞆に入れて、片道三時間半かけて、東京の学校に通い続けました。

その時に、支えとなったのは「東山碑」、門人衆が記したという碑文の言葉でした。

「毎宵、楷體一千字、行體千五百字、草體三千字を課と為し終歳怠らず」、日が昇り、そして沈むまで書の修練を続けたとの言葉は、私を支えました。

その名を、布川の地に、書の歴史に残すような偉大な書家が、そのように地道な努力をしていたとは、そのようなご先祖様がおられるとは…

昭和3年に生まれた私は、今年昭和100年を迎えました。老いを重ねた私には、布川は遥かに遠くなりました。

遠く成ればなるほど、父祖の地、布川に対する思い、杉野分家の最後の一人としての思いは、より一層深くなって参りました。あの当時は、つらい思いばかりしたはずなのに。

祖父が、父が、関東大震災の丸焼けの中、3月10日の東京アメリカ大空襲の中、守り続けた杉野家代々に伝わる「杉野東山」筆による掛軸を、末の

息子が、利根町の学芸員の皆様のお力をお借りして「利根町立歴史民俗資料館」に、託し、後に伝える手立ては整いました。

応順寺に静か並び立つ、「東山碑」「亀跌墓」を杉野分家に所縁深いものとして、杉野分家が布川に暮らした証しとして残せないものか、そしてまた、「杉野東山」の遺蹟を後世に伝えることはできないものかと考え、それが杉野分家の血を引く最後の一人としての務めであろう、ご先祖様に向けての供養になるであろうと信じております。

息子たちが、利根町役場さんに相談をしてみよう、お力を借りてみよう、利根町教育委員会、利根町文化財保護審議会の先生方に話をしてみようと伝えてくれました。

杉野の血は息子たちに受け継がれている、そう思い、全てを息子たちに委ねます。

応順寺では、今後、二十年、三十年経たのちには、墓石、墓碑等は全て廃棄処分にするとのことです。歴史的文化的価値が高い墓石、墓碑等がその様な形で失われてしまうことがないことを杉野分家の最後の一人として願うばかりです。

是非とも、利根町役場の皆様のお力をお借りしたく存じますので宜しくお願い致します。

令和七年四月二十三日